

主催：私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の再生と危機」  
早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」  
スーパーグローバル大学創成支援事業・日本文化学拠点  
角田柳作記念国際日本学研究所

## シンポジウム「朝河貫一と日本中世史研究の現在」報告書

日時：2015年12月5日(土)14時00分～18時00分

会場：早稲田大学小野記念講堂



### 【プログラム】

- 14:00～14:10  
趣旨説明  
司会 海老澤衷（早稲田大学文学学術院教授）
- 14:10～14:50  
講演1  
佐藤雄基（立教大学文学部准教授）  
「日本の中世史研究からみた『入来文書』」
- 14:50～15:30  
講演2  
似鳥雄一（早稲田大学文学学術院助手）  
「越前牛原荘の研究と朝河」

●15:30～16:10

講演3

中村治子（イェール大学東アジア図書館 日本研究専門司書）  
「朝河の史料収集および朝河文書の紹介」

●16:30～18:00

パネルディスカッション

海老澤衷（司会）、佐藤雄基、中村治子、  
近藤成一（東京大学史料編纂所教授）、甚野尚志（早稲田大学文学学術院教授）

## 【報告要旨】

### 趣旨説明

#### ◆海老澤衷：（早稲田大学文学学術院教授）

##### 「シンポジウム「朝河貫一と日本中世史研究の現在」開催にあたって」

このシンポジウムはイェール大学教授朝河貫一（1873-1948）の先駆的な日本中世史研究の意義を再評価し、欧米と近代日本の人文学形成を広い視野から検証するものである。

朝河貫一は1873年（明治6）福島県二本松に生れ、福島尋常中学校（後の安積中学）卒業後、東京専門学校（早稲田大学の前身）文学科に入学。1896年にはダートマス大学に編入学し、1899年にイェール大学大学院歴史学科に入学。『六四五年の改革（大化改新）の研究』（英文）によりPh.Dを授与される。ダートマス大学講師を経て、1907年イェール大学講師。イェール大学図書館東アジアコレクション部長を兼任する。1917年（大正6）東京帝国大学史料編纂所に留学し、史料の収集に尽力した。1937年イェール大学歴史学教授に就任し、1942年定年退職、名誉教授となる。1948年（昭和23）8月11日に没す。

朝河貫一は日露戦争後から第二次大戦に至る国際的な平和実現への努力が高く評価され、すでに多くの研究があるが、今回のシンポジウムでは、彼の学術的な側面に立ち返って、いわば原点からの再評価を行う。その場合、主要著書は『入来文書（*The documents of Iriki*）』（英文、1929年。和文、1955年）と『荘園研究（*Land and Society in Medieval Japan*）』（英文、日本学術振興会、1965年）の二冊であろう。これらは、フランス中世農村史の研究者、あるいはアナル学派の祖として知られるマルク・ブロックとの交流の前提となったものでもある。今回は朝河の主要な研究フィールドであった薩摩国入来院と越前国牛原荘を中心に研究業績を多角的に検討する。さらにイェール大学図書館所蔵資料から朝河のキュレーターの側面に焦点をしばり、その学術的な基盤を明らかにするものである。

### 講演

#### ◆佐藤雄基（立教大学文学部准教授）

##### 「日本中世史研究からみた『入来文書』」



朝河は1929年に主著 *The Documents of Iriki*（『入来文書』）を刊行した。その主眼は、鎌倉時代に入来院（現・鹿児島県薩摩川内市）に地頭職を得た渋谷氏・入来院氏を事例として、日本封建制の発展過程を描くことにある。入来院家文書を中心にして、その関連文書255点を選択し、編年に並べ、英訳・解説・注釈を付した。朝河の議論は、西欧の封建制論を踏まえており、欧米の歴史学界に日本封建制論の基礎データを提供するものであった。

『入来文書』は、このようにして国際的な日本史研究のシンボリックな存在となる反面、その内容は必ずしも十分に読解

されてこなかったのではなからうか。本報告では、サンプルとして 16 号文書を取り上げて、朝河の鎌倉幕府観を紹介した。朝河以前の日本封建制論は日欧の類似に注目する傾向があったが、朝河は日欧封建制の「似ている」面のみならず、先駆的に「違い」にも視点を向けていた。そこに日本の中世史研究の主流とは異なる『入来文書』の面白さがある。

それではそのような『入来文書』の視点はどのように見過ごされるようになったのだろうか。『入来文書』は、牧健二の日本封建制論などに影響を与えたが、第二次世界大戦後は必ずしも継承されなくなる。戦後の日本において、和文の史料集部分を一から編纂した『入来文書』復刻版が 1955 年に刊行され、それに触発された永原慶二の入来院研究（散居型村落論で著名）以降、現地調査を踏まえた在地領主論・村落論が盛んに行われる。そのなかで朝河は先行研究としては参照されなくなる。

『入来文書』が戦後のアメリカの日本史研究のベースとなったという理解が一般的であるが、本当にそうであろうか。朝河の学説はエドウィン・O・ライシャワーによる日本近代化論の土台となったと評価されているが、ライシャワーは必ずしも朝河の著書を直接的に引用しているわけではないし、日欧の「違い」に必ずしも目を向けなかった。一方、ライシャワーの弟子で戦後イェール大学において教鞭を執ったジョン・ホールは朝河の『入来文書』を咀嚼しつつ、日本封建制論を集大成したが、その朝河理解には偏りはなかつたのだろうか。ホールの弟子であるジェフリー・マスの時代になると、アメリカの学者は日本に留学し、直接的に日本の中世史研究から学ぶようになった。そのような背景もあって、日本の学界の主流とは異なる『入来文書』の知見は継承されなくなったのではなからうか。

このような朝河『入来文書』の受容史からは、日米の日本史学のたどった戦後の歩みがみえてくる。

#### ◆似鳥雄一（早稲田大学文学学術院助手） 「越前牛原荘の研究と朝河」



朝河の没後、その遺稿集として『LAND AND SOCIETY IN MEDIEVAL JAPAN(邦題：荘園研究)』が刊行され、この書において、越前国牛原荘の起源、院政期から鎌倉幕府成立までの同荘の動向について史料の英訳と解説がある。

越前国牛原荘は現在の福井県大野市に存在した荘園であり、大野盆地の西部にあった醍醐寺領の荘園である。現在に至るまで専論的な研究は少なく、本格的な荘園調査は行なわれてこなかった。朝河は「御佃」と呼ばれる領主直営地の小ささを指摘し、その所以を水田耕作の集約性に求めている。稲作は非常に手間がかかり、可耕地・労働力ともに限られる。そのため農民は小作地の耕作で手一杯となり、直営地は労働力が不足する。荘内における身分階層は流動的であり、ヨーロッパと大きく相違するものと位置づけている。近代歴史学が主に日本とヨーロッパの類似性を求める中で、相違点を明確に主張した点が注目される。

近年は、平安時代から鎌倉時代に至る荘園研究において、立荘論と呼ばれる研究が行なわれているが、それに則って考察すれば、この牛原荘においても立荘時にあらかじめ年貢高を定め、それに見合った規模の領域を準備したと考えられるのである。牛原荘に割り当てられた 500 石の年貢も一つの目標値であった可能性が高く、それを満たすだけの耕地が当初より存在したとは考えられない。従って、「直営地の全体に占める割合の低さ」は必ずしも実態を反映していたとはいえない。

応徳 3 年（1086）における牛原荘の四至を現地に即して考察すると、北の「油滝」については、先行研究から九十九廻坂に比定でき、東の「真中河」、西の「坂戸」も今に残る地名から問題はないであろう。南の「猪山」は、大野城のある亀山付近に「水落町」という地名があり、中世史料にも「猪山之裏水落」という文言があり、「猪山」は亀山の方が従来の説よりも可能性が高い。

#### ◆中村治子（イェール大学東アジア図書館 日本研究専門司書） 「朝河の史料収集および朝河文書の紹介」

イェール大学における日本語資料の発展を考えると、その最古の例としてあげられるのが卒業生 Alex H. Stevens によって寄贈された『大智度論』である。1851 年のことで、日本資料がアメリカ大学図書館で所蔵されていたとする現存の記録の中で最も古いものである。1870 年代に至るとイェール大



学に初の日本人留学生が入学し、大学図書館長 Addison Van Name と Julia 夫人の兄の Josia Willard Gibbs 教授の住居に宿泊するようになる。Addison Van Name はそこで知り合った日本人留学生を介して 1976 年、古生物学の Othniel Charls Marsh 教授からの寄付金をもとに 2700 冊の日本書籍を購入している。

このような伝統の中で、朝河が 1907 年 9 月にイェール大学歴史学教師および東アジアコレクション部長に就任した。そして、イェール大学に就任する前の 1906 年 2 月から 1907 年 8 月まで米国議会図書館とイェール大学の依頼を受け、日本にて資料収集を行ない、議会図書館に 45000 冊（製本後 9072 巻）、イェール大学に 21520 冊（製本後 3578 巻）が収められることになった。この 1 年半ほどの収集活動を皮切りとして、半世紀に及ぶ朝河のイェール大学での日本資料構築の活動が開始される。

朝河関連資料は①日本文書コレクション、②東アジア図書館スペシャルコレクション、③日本イェール協会コレクション (YAJ)、④朝河貫一文書に大別される。①は正式名称 Japanese Manuscript Collection で 1972 年にバイネキ稀覯本図書館に移動されている。朝河が 1906 年から 1907 年にかけて収集した写本が大半で、588 タイトル、約 1200 冊（製本後）である。この時期に収集された資料には 1907 年の蔵書票が貼付され、洋風の製本がなされた。②は全体が約 1700 タイトル、3000 冊で、他の寄贈者からの書籍と一緒に朝河が収集した江戸後期から明治期の版本、地図等が収められている。その他にも 1907 年に収集した近世の写本も 100 冊ほど含まれる。③は朝河が 1917 年から 1919 年にかけて訪日した際に、イェール大学の日本人卒業生に募金を集い、東京帝国大学の黒板勝美が選書に協力したものである。1934 年にイェール大学日本人卒業生の寄贈として大学に送られた。④は朝河自身の日記、書簡、論文草稿、講演ノート、写真等であり、正式名称は Kan' ichi Asakawa Papers (MS40) として Manuscript and Archives collection に所蔵されている。

その MS40 の中に新しく追加される資料として、1906-1907 年度の詳細な資料収集メモが最近発見された。そのメモには三上参次、幸田成友、中野達慧、宮内幸太郎など多くの研究者、文化人の名前が見える。また、図書館などの公的施設の外、多くの古書店などが記され、その足跡がわかる資料として貴重である。このように多くの朝河関連の資料をどのように世界中の研究者に効率的に利用される環境を作るかが今後の大学の課題となっている。その取り組みの一環として Asakawa Epistolary Project の作成などが挙げられる。

## パネルディスカッションにおけるコメント

### ◆近藤成一（東京大学史料編纂所教授）

#### 「シンポジウム「朝河貫一と日本中世史研究の現在」

近年、矢吹晋氏による朝河著書の日本語訳と紹介に関する精力的な仕事があり、没後 60 年を経て新たな朝河の業績に対する評価が加えられつつある。朝河著書の日本での刊行は 1955 年の『入来文書』（朝河貫一著書刊行委員会編、日本学術振興会）から始まり、1965 年には『荘園研究』（同委員会編、日本学術振興会）などで、日本の西洋史研究者にも影響を与えるようになった。

同時代の日本の学界を考えると、1915 年 3 月刊行の『史学雑誌』26-3 で黒板勝美が「朝河氏の『日本荘園の起源』を読む」を載せ、朝河が「日本封建土地制度起源の拙稿につきて」を掲載し、2006 年日本留学以来の国内におけるネットワークの構築が見られる。1929 年 8 月には『法学論叢』22-2 に牧健二が「朝河貫一氏の英文入来文書に就いて」を發表し、1935 年には牧健二の著書『日本封建制度成立史』が刊行され、朝河の戦前における学術的評価が定まったといえるのであろう。

戦後においては永原慶二による「中世村落の構造と領主制—小村=散居型村落の場合—」（稲垣泰彦・永原慶二編『中世の社会と経済』東京大学出版会）が示した入来院研究が中世村落史研究の基点としての役割を果たした。また、堀米庸三「封建制再評価への試論—近代化論の再検討—」（『展望』87、1966 年）は近代化論を擁護するのに、朝河を利用したが、アメリカにおける日本史研究においては、スタンフォード大学の Jeffrey P. Mass により、基本史料の英訳に基づく研究手法が継承された。

◆ 甚野尚志（早稲田大学文学学術院教授）

「朝河貫一、マルク・ブロック、オットー・ヒンツェ  
ー三人の歴史家の「封建制」概念をめぐってー」

朝河の『入来文書』について、ヨーロッパの歴史家ではマルク・ブロックとオットー・ヒンツェが書評を行ない、高く評価した。しかし、この三人は封建制そのものに関する理解については一致を見ていない。ここではその相違点について考えてみたい。1973年に石井進は「日本の封建制と西洋の封建制」（堀米庸三編『歴史学のすすめ』筑摩書房、1973年）において、堀米庸三がライシャワーの著名な学説「完全な封建制度の発達はヨーロッパと日本のみ。封建制の経験が近代化を促した」を擁護し、ライシャワー理論の背後に朝河の比較封建制研究があると指摘し、日欧封建制の間に本質的な類似性があるとしたことに疑問を呈した。ここに示された石井の疑問を出発点として、この問題の再考を試みる。実のところ、ヨーロッパ中世史研究では封建制は多くの批判にさらされている。

法制史研究者は家臣と主君の法的な関係を封建制の核心とするが、ブロックは人と人の結合する形として封建制を考える。血の絆が不十分となった社会で、秩序形成の新しい原理として封建的主従関係が生まれる。一方、朝河の封建制的理解は、伝統的な法制史研究者の立場といえる。これに対してオットー・ヒンツェは、封建制が、古代の帝国の文化的影響下にある地域で中世の国家的統合を実現する際に発達する制度であると指摘した。その意味で封建制は、中世ヨーロッパだけでなくロシア、イスラム諸国家、日本にも見られるとする。このような三者三様の状況を見ると「封建制」概念そのものが大きく揺らいでいることがわかる。

討 論



会場出席者との質疑応答の時間を予定していたが、充実したコメントであったため十分に質疑応答する時間は取れなかった。最後に司会から早稲田大学名誉教授小倉欽一氏を指名し、本日の所感をいただいた。小倉氏は、「封建制概念は十分に有効と考えるが、中世の諸都市において商業が発達すると、領主と農民の関係も複雑になる。朝河は、日本における封建制の学術的情報を国際的に広めた点で価値が高い。マルク・ブロックと朝河貫一の交流がもたらしたものを今後もさらに深く研究する必要がある。」と述べられた。

（文責：海老澤衷）